

「うなぎ食べ継ぐプロジェクト」 年次報告書 概要版

—2024年 活動記録—



株式会社エーゼログループ うなぎ食べ継ぐプロジェクト事務局

目次

1. はじめに.....	1
2. 目的と取組内容	4
3. 保全に関する取組内容と結果（2024年）	9
3-1. 効果的なウナギ放流手法の検討※概要のみ公開.....	9
3-2. ウナギの生息に適する生息環境づくり※概要のみ公開.....	9
3-3. 魚道の設置検討※概要のみ公開	11
3-4. ウナギの生息環境調査※概要のみ公開	11
4. うなつぐプロジェクト発表会.....	12
5. うなつぐプロジェクト第1回検討委員会※概要のみ公開	13
6. うなつぐプロジェクトの広がりの状況	15
6-1. うなつぐプロジェクトの拡大に向けての取組.....	15
6-2. ウェブサイト閲覧数（ビジター）の推移	17
6-3. 加盟店の対象商品販売状況	19
6-4. うなつぐ募金箱の設置状況及び募金状況.....	20
6-5. うなつぐサポート会員、うなつぐ賛助会員の状況	21
6-6. メディア等への掲載	23
7. 収支決算報告（2024年4～12月）	24
8. 総括.....	25
9. さいごに.....	27

本年次報告書概要版は、うなつぐ会員の方に向けて作成した年次報告書の内容から会員限定の一部情報を除き、概要を伝えるものとなります。

1. はじめに

「うなぎ食べ継ぐプロジェクト（略称：うなつぐプロジェクト）」は、2024年6月6日、新月の日にスタートしました。ニホンウナギ（以下、ウナギ）は5月から10月にかけて、マリアナ諸島近くの海で新月の夜に産卵するようです。うなつぐプロジェクトが始まった日の夜も、ウナギたちが卵を産んでいたかもしれません。マリアナで生まれ、長い長い旅の末にまたマリアナに帰ってきて産卵する。この壮大な命のバトンリレーが続くことで、私たちヒトはその命をいただくことができる。まずそのことをみんなで想うということを「うなつぐプロジェクト」のスタート地点としました。

私たちヒトがウナギを含むたくさんの命とのつながりを取り戻していくための長い長い旅を始めていきたいと考えています。



「ウナギやアユがゴヨゴヨといて、その中で子供たちが楽しく遊んでいる 風景」をいつか取り戻したい

2006年の初夏、今から18年前、私（牧）が32歳の時でした。
四万十川の河口近くの川漁師のおじいさん（当時90歳ぐらい）から聞いた言葉が頭に焼き付いて離れません。
戦争中は米が食べれなくてひもじい思いをした。
でもアユもウナギもゴヨゴヨとたくさんあったから、欲しいだけ捕って食べる事ができた。

カワウソの親子と人間子どもたちが一緒に川で泳いでいた。
現在とは比べものにならないほど、かつての川は豊かだった。

私はおじいさんに言いました。

**ボクはおじいさんがうらやましい。
自分が子供の時にそんな川で遊んでみたかった。
そんな素敵な風景を、この目で見てみたかった。**

するとおじいさんはこう言いました。
自分はもう歳なので、再び見ることはないだろう。
でも、あんたはまだ若い。
死ぬまでに時間がある。
その目で見ることができるかもしれない。

私はこのおじいさんの言葉を聞いて勇気をもらいました。
自分の中から未来に向かうエネルギーが湧き上がってくるのを感じました。

**確かに、諦めるのはまだ早い。
超長期で考えたら可能性はきっとある。**

自分が生きているうちに見れないとしても、これから生まれてくるこどもたちは見れるかもしれない。
ウナギやアユがゴヨゴヨといて、その中で子どもたちが楽しく遊んでいる風景を。

四万十のおじいさんに出会ってから18年が経ちました。
もうこの世におられないかもしれませんが、そのおじいさんの言葉は、50歳のおじいさんになった私の頭の中に今もあります。

このおじいさんと出会って3年後の2009年に、私はエーゼログループの前身となる（株）西粟倉・森の学校を設立しました。
木材の加工流通事業によって地域の森林・林業を元気にしていきたいと考えて立ち上げた事業ですが、

**森から始めて、
いつか川や海を豊かにしていくことへつなげていきたいと思い続けていました。**

そして、2017年に養鰻事業に参入します。木材加工によって安定的に出るようになった端材を燃料に水槽を加温し、ウナギを養殖する事業を始めました。養鰻事業者になることが、直接鰻を増やすことにつながらないことは分かっていました。しかし、中に飛び込んでその業界のことをよく理解しないと、ウナギを増やして行くための手がかかりはつかめないだろうとも思っていました。

中に飛び込んでやってみる。これは未来を拓くために自分がずっと大事にしているスタンスです。

そして、

2024年6月6日新月の日に、「うなつぐプロジェクト」を始めました。

中に飛び込み仲間ができて試行錯誤を重ねる中で、機が熟しました。

「ウナギやアユがゴヨゴヨといて、その中で子どもたちが楽しく遊んでいる風景」を取り戻すために、このプロジェクトを立ち上げました。

うなつぐプロジェクトの1年目は、やっと動き始めたという状況でした。今後に向けて、非常に有意義な議論もできましたし、まだ少ないですが、志を共有する仲間もじわじわと増えてきました。まだまだできていることは少ないですし、具体的な成果もありますが、この最初の「うなぎ食べ継ぐプロジェクト年次報告書」をまとめることを含めて、大事な一步は踏み出せたと思っています。日頃から活動を応援していただいている皆様にも、この報告書を通して、1年目の取組と一緒に振り返っていただければ嬉しく思います。

ヒトがウナギを含むたくさんの命とのつながりを取り戻していくための長い長い旅を続けていくため、引き続きみなさまの応援をいただければ幸いです。

2025年 4月

うなぎ食べ継ぐプロジェクト発起人 牧 大介

2. 目的と取組内容

うなづくプロジェクト（以下「本プロジェクト」）では、ウナギをはじめ、様々な生きものが生息できる豊かな環境を守りながら、持続可能なかたちで自然の恵みを享受できる未来の実現を目指します。そのために、本プロジェクトではウナギの保全と持続可能な資源利用、そして文化の継承に取り組めます。

まずは、株式会社エーゼログループ（以下「エーゼログループ」）の本社がある岡山県西栗倉村や周辺地域において実証やモデル構築に取り組み、最終的には取組やノウハウを横展開することで全国に取組の輪を広げていきます。

なお、本プロジェクトの対外的なスタートは2024年6月6日からですが、準備や放流試験等については2024年4月から始めており、「うなぎ食べ継ぐプロジェクト年次報告書概要版」-2024年 活動記録-」（以下「本報告書」）では、2024年4月から2024年12月までの取組内容を本プロジェクトサポーター限定情報を一部除き、まとめて報告しております。



最新の知見や科学技術を使いつつ、その地域の歴史的背景や特性、人々の生業や暮らしを大切に汲み取りながら、専門家や地域住民、関係者とじっくり対話を重ね、連携・協働しながら、着実に取組を前に進めていきたいと考えています。

以下に本プロジェクトでの取組内容を整理します。

① ウナギをシンボル種とした河川環境の保全・再生

ウナギの生息のためには、河川や沿岸域等において連続性が確保された水域が重要であることが指摘されています。また、かくれ場所のある多様な環境や、豊かな餌生物が存在している環境の重要性も指摘されていますが、成育場の環境変化により、ウナギの成育場は減少していることが指摘されています。連続性が確保された一つの水系に礫のある場所、水際に植生のある場所、堆積物のある場所といった多様な環境が存在することによって、多様な成長段階の個体がかくれ場所を利用し、生息することが可能になると考えられます。

本プロジェクトでは、西栗倉村やその近隣地域において、行政や地域の建設業者など多様な主体と連携しながら、ウナギをシンボル種（注1）としながら、多様な生きものが生息できる良好な河川環境の保全や再生に取り組んでいきます。

有識者とも連携しながら、最新技術を活用しながら実際のフィールドで実証と効果検証に取り組み、ノウハウを蓄積していき、最終的には全国にも展開可能なモデルの構築を目指します。なお、環境の保全・再生においては、効果や影響のモニタリングを行い、その結果に基づいて手法等の改善を行う順応的管理を基本方針とします。

最終的には、環境再生を切り口にしながら、防災、水源涵養、水質改善など様々な地域課題を同時に解決することを目指していきます。

(注1) シンボル種としてのニホンウナギについて

既往研究により、日本に生息するウナギ属魚類2種（ニホンウナギとオオウナギ）と周辺の淡水生物を対象とした野外調査から、ウナギ属魚類が淡水生態系の生物多様性保全の包括的なシンボル種として機能する可能性が示されています。これにより、河川環境の保全と回復を通じてウナギ属魚類の個体群を回復させる活動は、ウナギのみならず、淡水生態系全体の保全と回復にも貢献すると推測されています。

引用元：板倉・脇谷・Matthew Gollock・海部.Anguillid eels as a surrogate species for conservation of freshwater biodiversity in Japan.Scientific Reports

② データに基づく持続可能なウナギ資源管理の検討

日本では古くからウナギ資源の増加を目的に、養殖場から購入されたウナギの河川や湖沼への放流が行われてきました。しかし、現在のところ放流によるニホンウナギの資源回復の効果に関する知見は限定的であるとされています。

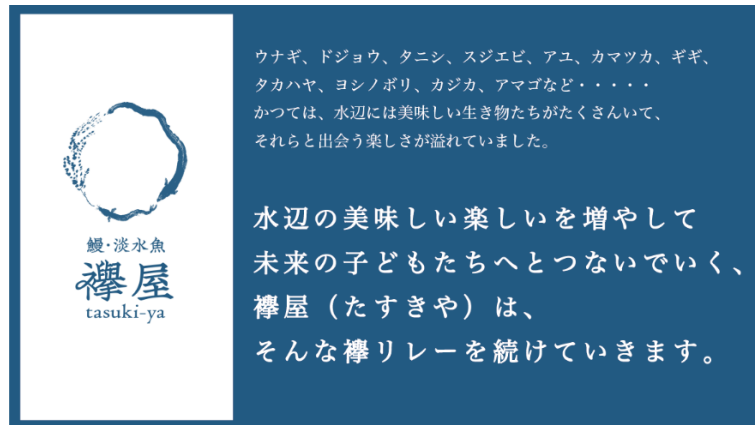
本プロジェクトでは、河川に隣接する水田環境をウナギ稚魚の生育域として活用することで、より効果的な放流ができるのではないかと仮説を立て、研究者とともに実証試験に取り組めます。

欧州などではモニタリングを通じた個体数管理に基づき、水域全体における余剰資源量を定量的に明らかにし、その中で利用を行う持続可能な資源管理を実践している事例もあります。必要なデータをとりながら、資源の再生産速度を上回らない範囲で利用を行う持続可能な資源利用の仕組みや効果的な放流手法について、研究者とも連携しながら構築していきたいと考えています。

③ 地方からの豊かな食や暮らしの提案、淡水魚食文化の継承

エーゼログループが立ち上げた新ブランド「鰻・淡水魚専門店 櫛屋」では、売り上げの10%を基金化し、本プロジェクトで取り組む上記①②の活動に使っていきます。ウナギと人の関わりは文化です。美味しい鰻料理の提供や、体験などを通じて、近年は途絶えてきてしまっているウナギをはじめとする生きものと人の関わりをもう一度取り戻したいと考えています。

ウナギに限らず、自然豊かな地方は食糧安全保障の観点で見ても非常に重要です。生きものを守ることは、地方の豊かな暮らし（Well being）の実現にもつながると考えています。まずはウナギについて知ることから愛着が生まれ、愛着からもっと知りたい、守りたいという行動につながっていく。食や体験を通じて、豊かな暮らしを提案していきます。



(図 1) 鰻・淡水魚専門店 禪屋のキャッチコピー

④ 消費者の行動変容やサプライチェーン全体への働きかけ

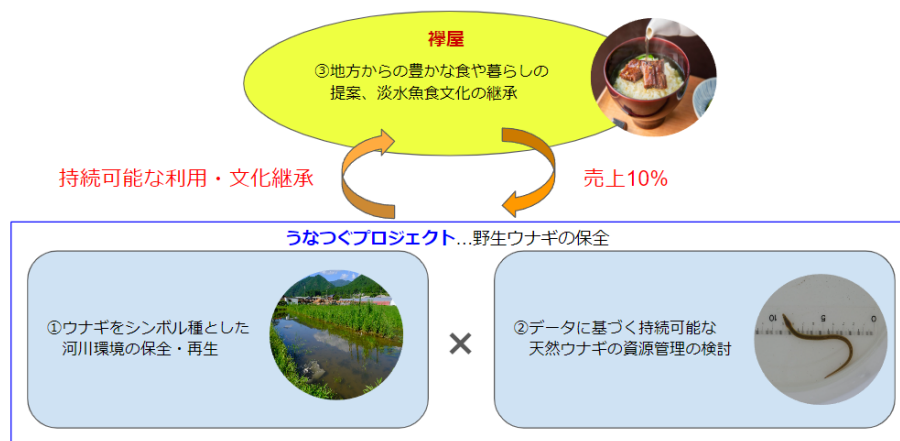
本プロジェクトは最終的にウナギの保護と持続可能な利用の両立を目指していますが、到底弊社だけの取り組みでは達成することはできません。多くの方々と連携、協働しながら、本プロジェクトを展開していきます。まずは直接、消費者の方々にウナギをお届けできる加工・小売業者という立ち位置から、以下の取組に力を入れていきたいと考えています。

✓ウナギの抱えている問題の現状を正しく、分かりやすく消費者の方々にお伝えする。

✓消費者やサプライチェーン上の事業者も直接活動に参画できる持続可能な仕組みをつくり、その輪を広げる。

✓消費者の方々の意見や考えを発信することで、本プロジェクトに共感し取組に参画する加工・小売業者を増やし、互いに連携・協働しながら、サプライチェーン上流の養鰻業者や、ひいては業界全体へ問題提起を行い、行動変容を促す。

少しずつ、一緒に取り組んでくれる仲間を増やししながら、波及効果を広げていきたいと考えています。



(図 2)本プロジェクトイメージ図。

特定水域のシラスウナギ採捕が行われなくなったとしても、単独地域における単独の対策のみでは対象地域のウナギの個体群を回復させることは難しく、ウナギの保全のためにはシラスウナギ採捕の管理に加えて、天然ウナギ漁の管理や生育場の環境回復などの幅広い対策を行うことが重要とする研究成果があります。このような、一連の脅威や多様な生活段階、複数の生態系を考慮して行うアプローチは「統合管理」と呼ばれ、EBM（生態系管理）の原則のひとつです。完全養殖に伴うシラスウナギ採捕の規制はあくまでもウナギ保護の一側面であり、合わせて天然ウナギ漁の方法や生息地の環境再生に取り組んでいくことが重要とされています。

引用元：海部・横内・Michael J Miller・鷲谷. Management of glass eel fisheries is not a sufficient measure to recover a local Japanese eel population. Marine Policy

本プロジェクトでは上記の取組を推進するために、エーゼログループや有識者等で構成する検討委員会の方針や実施方法などを検討していきます。検討委員にはウナギに関連する専門知識を有していたり、本プロジェクトに賛同いただいた方々に就任いただいております。年に1回、検討委員会メンバーを招聘し、本プロジェクトの取り組み内容や本プロジェクトに係る情報交換を行う「うなつぐプロジェクト検討委員会」を開催いたします。2024年の検討委員会の開催については本誌内「5.うなつぐプロジェクト第1回検討委員会」にて報告しております。

（検討委員の紹介（プロフィールとメッセージ））

○株式会社エーゼログループ 代表取締役CEO 牧 大介（まき・だいすけ）

1974年京都府宇治市生まれ。京都大学大学院農学研究科卒業後、民間のシンクタンクを経て2005年に株式会社アミタ持続可能経済研究所の設立に参画。森林・林業、山村に関わる新規事業の企画・プロデュースなどを各地で手掛けてきた。2009年に株式会社西栗倉・森の学校を設立し代表取締役、2015年10月にエーゼロ株式会社を設立し代表取締役に就任。2023年4月には森の学校とエーゼロを合併させ株式会社エーゼログループを発足し、代表取締役CEOに就任。うなつぐプロジェクトの発起人。



<メッセージ>

森、田んぼ、水路、川、海が分断されてしまっています。野生のウナギの生息環境を守るということは、この分断を解消して繋ぎ直していくということであり、失った生態系の豊かさを取り戻していくことになる。簡単ではないし、結果が出るまで時間がかかると思います。でも、仲間を増やしながら、もがけるだけもがいてみたい。

○中央大学法学部教授 海部 健三（かいふ・けんぞう）氏

1973年東京生まれ。八王子東高校、一橋大学社会学部を卒業後、社会人生活を経て東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程を修了。現在は中央大学法学部教授として科学論や環境学など一般教養科目を担当。河川や沿岸域におけるウナギの生態研究のほか、ウナギを適切に管理する仕組みづくりに関する研究活動を行う。IUCN種の保存委員会ウナギ属魚類専門家グループのメンバーとしてレッドリスト評価を担当。主な著書に「結局、ウナギは食べていいのか問題」（岩波書店）、「日本のウナギ 生態・保全・文化と図鑑」（山と溪谷社）など。



<メッセージ>

このプロジェクトに賛同した一番の理由は、掲げた目標と取り組みの内容、得られた結果が合致しているかどうか、証拠に基づいて判断しようとするエーゼロさんの姿勢です。模索しながら進行するプロジェクトだと認識していますが、まずは田んぼでウナギを育てる取り組みに注目しています。ウナギとお米は、食べ物としての相性が抜群です。そんなお米を育てる水田が、ウナギを含むいろんな生き物の成長の場になったら楽しいですね。

○八重洲 鰻はし本(1947年創業)店主 橋本 正平(はしもと・しょうへい)氏

1979年東京生まれ。DJやバックパッカーを経て24歳で家業に入る。2016年に4代目就任し、鹿児島県「泰正養鰻」など各地の養鰻場と取引を始め、2018年にエーゼログループの「森のうなぎ」の取り扱いが始まる。



<メッセージ>

自分は鰻専門店として何が出来るのかは全くわかりませんが、お話を聞いた時にまずこのプロジェクトに関わってる全員が自分と同じ鰻大好きで大切に考えている人しかいないと感じた事が、参加をしたいと思う大きな理由です。まだ誰もやった事がないことで簡単ではないと思いますが長い目で地道に諦めず、意見を交わし学び楽しみながら動いていければと考えています。

○あつたや 熱田 安武(あつた・やすたけ)氏

幼少期から、蜂獲りに狩猟、ウナギ漁、山芋掘りといった野遊びに夢中になったまま現在に至る。習性や生態、捕獲技能にのめり込んだ末、いかに次世代に残すかという父の原点に回帰している。現在は岡山県和気町の里山を拠点に、家族五人で暮らしをたてている。



<メッセージ>

幼少期からウナギに魅せられて、気づいたら父と同じように多くの時間をウナギのことに費やしてきました。夢中になって試し、失敗を重ねてウナギや師匠たちに教わってきたことを、ウナギの未来に向けて仲間と共に活かせたらと気持ちを膨らませています。

○株式会社ボーダレス・ジャパン 代表取締役社長 田口 一成(たぐち・かずなり)氏

1980年生まれ、福岡県出身。早稲田大学在学中に米国ワシントン大学へビジネス留学。卒業後、(株)ミスミ(現 ミスミグループ本社)を経て、25歳でボーダレス・ジャパンを創業。

社会課題を解決するソーシャルビジネスのパイオニアとして、日経ビジネス「世界を動かす日本人50」、Forbes JAPAN「日本のインパクト・アントレプレナー35」、EY「アントレプレナー・オブ・ザ・イヤー・ジャパン」に選出。2020年、カンブリア宮殿に出演。

TEDx『人生の価値は何を得るかではなく、何を残すかにある』の再生回数は100万回を超える。著書『9割の社会問題はビジネスで解決できる』はベストセラーに。



<メッセージ>

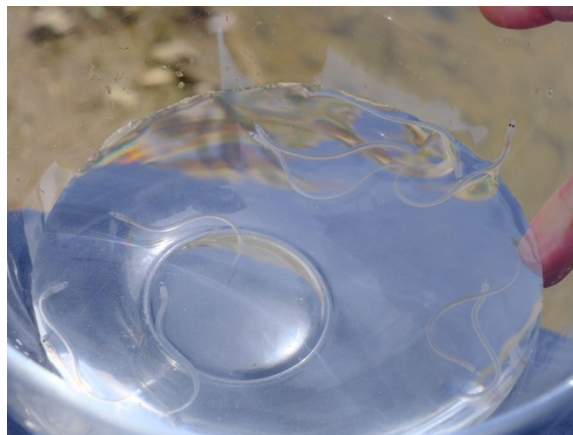
さすが、エーゼロ！この画期的なウナギの放流プロジェクトにワクワクしています！そして、持続可能な生態系&食文化を守るのは、私たち一人ひとりの市民です。みんながこの取り組みを、ふるさと納税を通して応援できるよう、ゆくゆくはこのプロジェクトが日本中に広がるよう、「ふるさと納税forGood」としても尽力していきたいと思います！

3. 保全に関する取組内容と結果（2024年）

3-1. 効果的なウナギ放流手法の検討

（概要）

ウナギの保全に効果的な放流手法の検討を行うことを目的として、中央大学法学部の海部教授と共同で、ビオトープを併設した田んぼ内へのシラスウナギの放流試験を実施し、その後のウナギの成長をモニタリングしました。



（写真 1）放流直前のシラスウナギ



（写真 2）放流から約 2 週間後の捕獲個体。
赤虫を捕食していると思われる（2024年4月26日）



（写真 3）放流から約 1 か月後の捕獲個体（2024年5月23日）

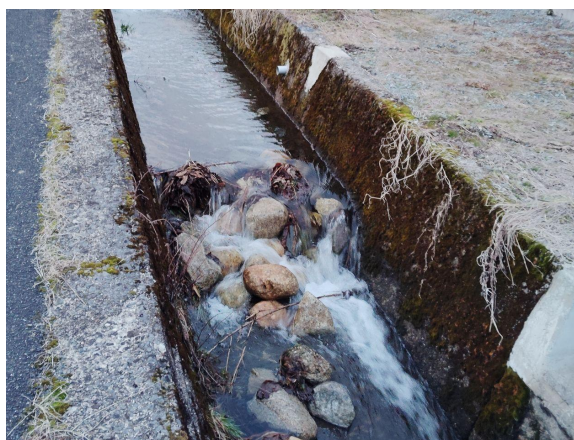
3-2. ウナギの生息に適する生息環境づくり

（概要）

水田内において深みのある池や水路の造成および、周辺水路における仕切り板設置や石入れ等を実施し、ウナギをはじめ多様な生きものにとって良好な生息環境の創出を実施しました。また実施前後の環境変化及び生きものの変化を調査しました。



(写真 4) 環境創出前の水路の様子



(写真 5) 3面コンクリート水路への石設置による
流れの変化の創出



(写真 6) 設置を行ったアングル及び堰き止め板



(写真 7) 多様な水草が繁茂する水田内の土水路（左）と池（右）

3-3. 魚道の設置検討

(概要)

取水堰や落差工等のように小規模であっても、河川横断構造物の中にはウナギの遡上に影響を与えているものがあることが調査研究によって示されています(注2)。ウナギが海から河川を遡上して生息域を広げるためには、海からの進入のしやすさと上流への遡上のしやすさ、言い換えれば、「縦方向のつながり」が確保されることが重要であると考えられています。

上記課題の解消へ向けたアプローチ方法の検討及び、シラスウナギ放流試験を実施している圃場と接続する水路と河川の合流部の落差解消を目的とした魚道の設置検討を行うために2025年3月5～6日に、有識者ヒアリング及び現地確認を実施しました。

(注2) ニホンウナギの生息地保全の考え方 平成29年3月 環境省自然環境局野生生物課

・有識者：国立高専機構香川高等専門学校 建設環境工学科 准教授 高橋直己 氏



(写真8) 可搬魚道（ポータブル魚道）のデモンストレーションの様子

3-4. ウナギの生息環境調査

(概要)

今後、ニホンウナギが暮らしていける良好な河川環境を創出することを目的として、創出すべき環境を把握する目的で、小河川を中心に野生のウナギの生息状況を調査しました。



(写真9) 生息状況調査の様子

4. うなつぐプロジェクト発表会

(概要)

2024年6月6日、月齢が0になる新月の日にエーゼログループは本プロジェクトを発足させ、オンライン発表会を開催しました。

(ニホンウナギはマリアナ諸島付近の海域で新月辺りに産卵することがわかってきています。遠く離れたマリアナでウナギたちが卵を産んでいるかもしれない新月の日にプロジェクトを発足しました。)

(目的)

本プロジェクトについて、広く世間一般に知っていただくことを目的に発表会を開催しました。

(実施内容)

日 時：2024年6月6日

出席者：中央大学法学部教授 海部健三氏

株式会社エーゼログループ 代表取締役CEO 牧大介

あつたや 熱田安武氏

事務局…株式会社エーゼログループ

議 題：

- ① うなつぐプロジェクト立ち上げの思い、プロジェクト趣旨説明 …牧大介
- ② ウナギをとる喜び、うなつぐプロジェクトへの思い …熱田安武氏
- ③ ウナギの資源管理に関する現状と課題・うなつぐプロジェクトに期待をすること
…海部健三氏
- ④ うなつぐプロジェクトが目指す未来



(写真10) うなつぐプロジェクト発表会の様子 (2024年6月6日)

うなつぐプロジェクト発表会の様子は「熱田尚子のうなつぐレポート 01 『プロジェクト発表会』」リンク：<https://tabe-tsugu.jp/unagi/post.php?id=2251> にてより詳しくお知らせしております。(右QRコードを読み取ることで記事掲載WEBページに進みます。)



5. うなつぐプロジェクト第1回検討委員会

(概要)

2024年11月6日-7日、本プロジェクトの第1回検討委員会を開催しました。
これまでの取り組み状況について共有がなされ、ウナギや地域の未来について、多角的な議論と合わせて、うなぎを放流したビオ田んぼや、ビオ田んぼとつながる川などの現場を視察しました。

(目的)

年に1回、本プロジェクトの検討委員メンバーが集まり、本プロジェクトの取組状況や課題、今後の取組等についての共有と議論、現地視察等を行うことで、最新情報を踏まえながら、より効果的な取組に発展させるための機会を創出することを目的としています。

(実施内容)

日 時：2024年11月6日…議論

11月7日…現地視察（ビオ田んぼ、吉野川）

出席者：検討委員…中央大学法学部教授 海部健三氏

株式会社ボーダレス・ジャパン 代表取締役社長 田口一成氏

株式会社エーゼログループ 代表取締役CEO 牧大介

あつたや 熱田安武氏

（八重洲鰻はし本 店主 橋本正平氏は予定が合わず欠席となりました）

加盟店…櫛屋

事務局…株式会社エーゼログループ

議 題：

①2024年放流試験について状況共有（モニタリング結果）、今後の課題

- ・ウナギの放流試験と追跡調査の報告
- ・放流試験の前提と目的

②環境づくりについて

- ・田んぼの環境改善と生物多様性の増加

③うなつぐPJの広がり状況

④今後の展開や取り組みについての議論（意見交換）

- ・完全養殖が商業化されたときの課題と展開
- ・うなつぐPJの長期目標と展開
- ・PJをさらに波及させていくための仕掛けづくり

第1回うなつぐ検討委員会の様子は「熱田尚子のうなつぐりポート 03『第1回検討委員会』」リンク：<https://tabe-tsugu.jp/unagi/post.php?id=2520> にてより詳しくお知らせしております。（右QRコードを読み取ると記事掲載WEBページに進みます。）





(写真11) 議論の様子 (2024年11月6日)



(写真12) 現地視察の様子 (2024年11月7日)

6. うなつぐプロジェクトの広がりの状況

6-1. うなつぐプロジェクトの拡大に向けての取組

本プロジェクトは最終的にウナギの保護と持続可能な利用の両立を目指していますが、様々な課題に横断的に取り組む必要があり、到底弊社だけの取り組みでは達成することはできません。そのため、様々な立場の多くの方々と連携、協働しながら本プロジェクトを展開していきたいと考えています。まずは直接、消費者の方々にウナギを届けることができる加工・小売業者という立ち位置から、以下の取組に力を入れていきたいと考えています。

- ① ニホンウナギの抱えている問題の現状を正しく分かりやすく消費者の方々に伝える。
- ② 消費者も直接活動に参画できる持続可能な仕組みをつくり、その輪を広げる。
- ③ 消費者の方々の意見や考えを発信することで、本プロジェクトに共感し取組に参画する加工・小売業者を増やし、互いに連携・協働しながら、サプライチェーン上流の養鰻業者や、ひいては業界全体へ問題提起を行い、行動変容を促す。

上記を踏まえてまずウェブサイト（ <https://tabe-tsugu.jp/unagi/> ）にて情報の集積や記事発信を通じて情報発信を行うこととしました。本ウェブサイトの立ち上げにはコンセプトメイキングからデザイン企画等を「EDING:POST / エディングポスト」（本社：東京都世田谷区、代表取締役、クリエイティブディレクター / デザイナー 加藤 智啓氏）にも関わっていただきました（図3）。

そして現在、消費者の方が直接関わるができる仕組みとして以下の4つを用意しています。

- ①本プロジェクトのウェブサイトを開覧して、一石を投じる。（後述6-2）

ウェブサイト閲覧数に応じて、生息地再生を行っている水路に石入れを行います。

- ②加盟店で鰻料理を食べて、プロジェクト支援する。（後述6-3）

加盟店での商品価格の10%が本プロジェクト資金として寄付されます。

- ④ 募金して応援する。（後述6-4）

加盟店およびうなつぐ募金箱設置協力店に設置されている募金箱に募金いただくと本プロジェクト資金として寄付されます。

- ⑤ うなつぐプロジェクトメンバーになる。（後述6-5）

年会費をお支払いいただくことで、本プロジェクトメンバーの一員となり、特典を受けることができます。現在、「うなつぐサポート会員」と「うなつぐ賛助会員」の2種類を用意しています。年会費は本プロジェクトの資金として活用させていただきます。

それぞれの活動について、以下で詳しく状況を報告します。

6-2. ウェブサイト閲覧数（ビジター）の推移

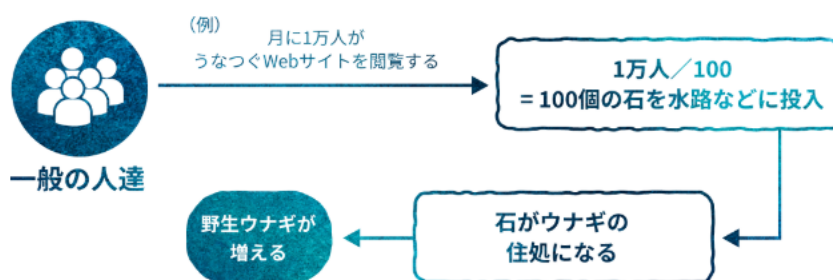
本プロジェクトのウェブサイトが公開となった2024年6月分から、ウェブサイトへの訪問者数（ビジター数）をカウントし、100人あたり1個の石を2024年7月より、ウナギの生息環境整備の目的で水路に投入しています。なお、投入や水路の環境変化の様子は本プロジェクトウェブサイト内の「うなつぐりレポート」にて原則、毎月公開をしています。

公開サイトURL：<https://tabe-tsugu.jp/unagi/report.php>



石を投入している水路はウナギの稚魚（シラスウナギ）の放流試験を行っている圃場とつながっており、水路内の環境が整うことで、成長したウナギが継続的に生育できる環境づくりにもつながります。なお、石入れによる環境の変化について詳しくは本報告書「3.保全に関する取組内容と結果（2024年度）具体取組②：ウナギの生息に適する生息環境づくり」にて報告しております。

2024年6月から2024年12月までのウェブサイトへの月別訪問者数の推移は（図5）のとおりです。2024年12月末日時点で累計訪問者数は1745人、累計の石入れ数は16個となっています。なお、石入れについては環境創出の効果を高めるために、この活動以外でも行っています。



（図4）参加型石入れの仕組み

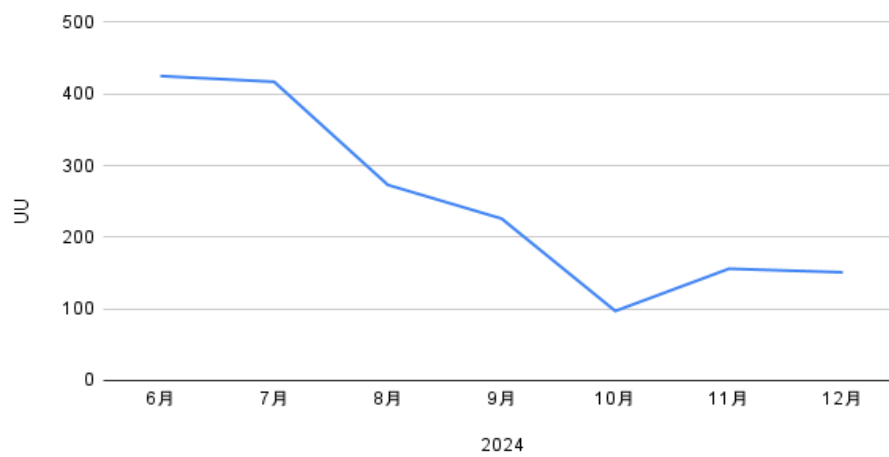


（写真13）石入れの様子

2024年	月別サイト訪問者数	石入れ数
6月	425	4
7月	417	4
8月	273	2
9月	226	2
10月	97	1
11月	156	1
12月	151	2
合計	1745	16

(図5) 月別サイト訪問者数

2024年6月～12月のユニックユーザー数(月別サイト訪問者数)



(図6) 月別サイト訪問者数の推移

6-3. 加盟店の対象商品販売状況

2024年12月末日時点での本プロジェクト加盟店は「八重洲 鰻 はし本」（東京）と「鰻・淡水魚 禪屋」（岡山）の2店舗です。



「八重洲 鰻 はし本」では本プロジェクト対象商品として、「うなつぐ重」を2024年7月より提供開始しています（写真14）。販売価格は7,700円（税込）で、購入いただくとそのうち10%にあたる770円が本プロジェクト資金として寄付されます。



（写真14）「八重洲 鰻 はし本」で提供されている「うなつぐ重」

「鰻・淡水魚 禪屋」では本プロジェクト対象商品として、以下を10%還元対象としています。

- ① 蒲焼等製品（オンラインショップや卸先等への販売分）
- ② BASE101%物販（BASE101%の店頭における蒲焼の販売分）
- ③ BASE101%飲食（BASE101%で提供しているうな井及びうな重の売上分）
- ④ エーゼログループ内部間取引

BASE101%は、エーゼログループが運営する飲食店舗です。この店舗では2024年から「禪屋の国産うな井」2,500円（税込）、「禪屋の国産うな重」4,800円（税込）の2種類を提供しております（写真15）。なお、「鰻・淡水魚 禪屋」の商品はオンラインショップでもご購入いただけます。

オンラインショップURL：<https://store.gurugurumeguru.jp/?mode=grp&gid=2982054>

2024年4～12月までの加盟店舗における寄付金総額は710,352円となっています。



(写真15) BASE101%で提供されている「禪屋の国産うな重」

6-4. うなつぐ募金箱の設置状況及び募金状況

うなつぐ募金箱設置協力店において設置されている「うなつぐ募金箱」に募金していただくと、その全額は本プロジェクトの資金として寄付されます。

「うなつぐ募金箱」はひとつ1,100円（税込）でご購入いただき、各店舗にて設置していただくことができます。募金箱は間伐材を用いて、ウナギ漁で使う「地獄罟」を模して作られています。

2024年12月末日時点で、設置協力店は「八重洲 鰻 はし本」と「鰻・淡水魚 禪屋」、「ろっかん」、「BASE101%」の合計4店舗、募金総額は18,466円となっています。



(写真16) ウナギ漁に用いる「地獄罟」を模して造られたうなつぐ募金箱



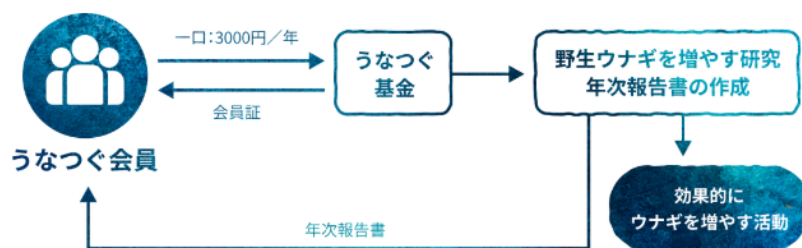
(写真17) 「八重洲 鰻 はし本」で設置されている募金箱の様子

6-5. うなつぐサポート会員、うなつぐ賛助会員の状況

○うなつぐサポート会員

年会費一口3,000円（税込）をお支払いいただくと「うなつぐサポート会員」となることができます。メルマガで本プロジェクトの近況報告が届くほか、特典として会員証と本報告書が送付されます。また、メールで本プロジェクトに係るイベント等の案内をお送りいたします。

皆さまからの会費は積み立て、本プロジェクトにて行う調査や研究や普及啓発活動に使わせていただきます。



（図7）うなつぐサポート会員の仕組み



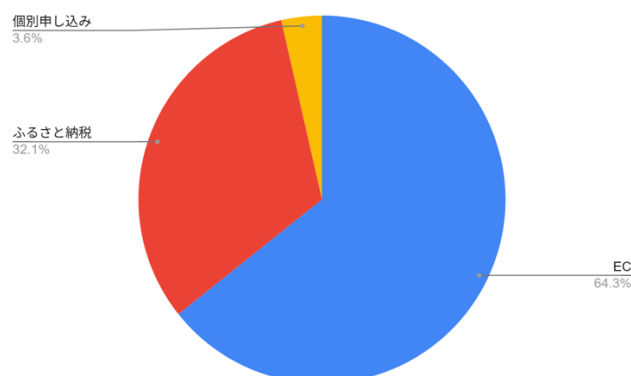
（写真18）うなつぐサポート会員募集ページ



（写真19）間伐材を活用した「うなつぐ会員証2024」

2024年12月末日時点で「うなつぐサポート会員」は合計28名となっており、申し込みはECサイト経由が19名、ふるさと納税サイト経由が9名、個別申し込みが1名となっています。ECサ

イトを通じての申込数が多いことから、引き続き、ECサイトとうなつぐプロジェクトウェブサイトとのリンクを高めながら、本プロジェクトの情報発信に力を入れていきたいと考えています。



(図8)「うなつぐサポート会員」申し込み経路

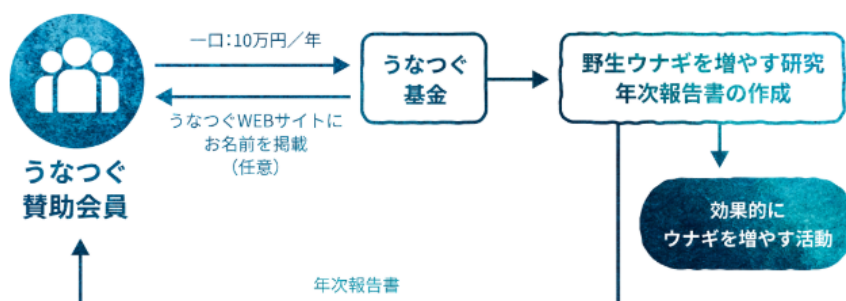
会員の皆様へは、メールマガジンを通じて本プロジェクトの近況や進捗状況のご報告、年に1回発行する本報告書を通じてより詳細な取組状況や次年度の取組内容などについて、情報を共有させていただきます。

○うなつぐ賛助会員

本プロジェクトの活動を応援・ご支援いただける企業や団体向けには「うなつぐ賛助会員」を用意しています。年会費一口 100,000円(税込)をお支払いいただくと「うなつぐ賛助会員」となり、メルマガで本プロジェクトの近況報告が届くほか、特典として会員証と本報告書が送付されます。また、メールで本プロジェクトに係るイベント等の案内をお送りいたします。また、賛助会員様は本プロジェクトのウェブサイトにおいて、お名前や企業・団体名を掲載(任意)していただくことも可能です。

皆さまからの会費は積み立て、本プロジェクトにて行う調査や研究や普及啓発活動に使わせていただきます。

2024年12月末日時点での賛助会員数は0名です。(2025年になってから申込みが1件あり、2025年4月時点における賛助会員数は1名となっています。)



(図9) うなつぐ賛助会員の仕組み

6-6. メディア等への掲載

プロジェクトの開始発表後、複数のメディアにおいて取材をしていただいております。以下に2024年の掲載されたメディア名、記事タイトル、公開日を記載します。

○マイナビ農業

タイトル：「森のうなぎ」がつくる林業と水産業の循環。中山間地域を守る取組が海の資源も守る

公開日：2024年6月29日

記事リンク：https://agri.mynavi.jp/2024_06_29_270501/

○日本経済新聞

タイトル：ウナギ「食べて守る」エーゼロ、循環モデル挑戦

日時：2024年7月7日（オンライン）、2024年7月9日（紙面）

○月刊「Wedge」

タイトル：

WEDGE REPORT 問題は「土用の丑の日」にあらず ウナギの消費に適正上限

COLUMN 天然ウナギを増やすため住環境を整える

日時：2024年10月19日

7. 収支決算報告（2024年4～12月）

収入		
項目	金額	備考
加盟店寄付総額	¥710,352	プロジェクト加盟2店舗寄付総額
募金総額	¥18,466	募金箱設置4店舗の募金総額
うなつぐサポート会員 年会費	¥84,000	年会費3,000円×28名分
合計	¥812,818	

支出		
項目	金額	備考
放流試験関連費	¥3,132	(内訳)トラップ製作費、モニタリング関係費
生息環境創出費	¥137,000	(内訳)石運搬費、水路アンカー(仕切り)設置費
うなつぐ検討委員会関係費	¥86,701	(内訳)検討委員会出席に係る検討委員交通費
合計	¥226,833	

差引収支(繰り越し)	¥585,985
------------	----------

※金額はすべて税抜

8. 総括

2024年から始まった本プロジェクトですが、持続可能なウナギの資源管理や生息環境の創出に向けた実証的な活動を積み重ね、一定の知見と成果を蓄積することができました。一方で、実施過程で明らかになった課題については、今後の改善と発展に向けた重要な検討事項として、引き続き検討委員メンバーをはじめ多くの方のお力添えをいただきながら、目標の達成に向けて取組を進めていきます。

以下に今後の課題と取り組み事項について、整理します。

水田へのシラスウナギ放流試験に関しては、成長の追跡を行うための調査手法に課題があり、2024年は放流後3～4か月頃までしかモニタリングを継続することができませんでした。今後はシラスウナギの成長に合わせた適切な調査手法開発（特にトラップの精度向上など）を中心に、有効なモニタリング手法の確立が不可欠です。また、田んぼからの流亡対策や、水系をまたいだ放流の適否といった生物学的視点を踏まえた放流地選定の検討も専門家の知見も踏まえながら2025年も引き続き放流試験を進めていきたいと考えています。また、シラスウナギの捕獲場所と同所あるいは同じ水系における放流が最も望ましいとされることから、新たな放流試験地の検討も進めていきます。

環境整備に関しては一定の効果がみられたものの、土水路やビオトープの維持管理において水漏れや水位の変動などの課題が確認されています。今後は生きものの保全により効果的と思われる構造的な改善に加え、労力をかけずに管理可能な管理体制構築や点検の仕組みづくりも求められます。特に、水路へ簡易的に設置が可能な堰止め構造物については、増水時でも流亡しない安全性や、設置・撤去のしやすさの両立が重要と考えています。2025年は適宜、専門家にも知見をいただきながらより効果的な環境整備を行うほか、周辺地域へと波及させていくための取組も行っていきたいと考えています。さらに、継続的に環境モニタリングを行っていくためにも、市民参加型のモニタリング調査実施も検討を行っていきます。

魚道整備については、ウナギをはじめ河川の生きものの保全に魚道の設置が効果的と考えられることから、専門家と協働しながら可搬魚道などの最新の技術を活用し、ウナギをはじめ河川の生きものの移動の障害となる小規模な落差を解消する取り組みを加速させていきます。2025年は、本プロジェクトを推進するための重要な取組として専門家との連携体制を構築し、実際のフィールドへの可搬魚道設置および効果検証を行うなど実証試験を重ねていきます。最終的にはシラスウナギの遡上を阻害していると思われる全国の河川へ可搬魚道を設置していくことを目指し、まずは数地点での可搬魚道の設置についても調整等を進めていく方針です。

生息環境調査については、効果的な保全活動を進めていくために今後も引き続き、海岸部の小河川を中心に調査や新たな取り組みフィールドの検討を進めていく予定です。

本プロジェクトの拡大にあたっては今後は「広報活動の強化」と「サポーター層の拡大」に一層、力を入れて取り組む必要があります。プロジェクトの理念や活動の意義をより多くの方々に知っていただくために、WebやSNSを活用した情報発信、参加型イベントの実施、教育機関との連携など、多様なアプローチによる発信力の向上を実施していきたいと考えています。あわせて、ふるさと納税やクラウドファンディング、企業連携などの仕組みを通じて、プロジェクトへの共感と支援の輪を広げることも、2025年以降の大きなテーマとなります。具体的には、活動をさらに広げていくためにも一般社団法人の設立に向けての検討を進めています。

今後もウナギを切り口に社会との接点を深め、多様な主体との連携と協働をさらに強化していくことで、ウナギをはじめ、様々な生きものが生息できる豊かな環境を守りながら、持続可能なかたちで自然の恵みを享受できる未来の実現を目指して活動をしていきます。

9. さいごに

このレポートを読んでいた皆様へ

うなづくプロジェクトが始動してから1年が経とうとしています。

私たちの活動はまだ小さな一歩かもしれませんが、ウナギという命やウナギに関わる文化を通して、自然とのつながりを見つめ直し、地域と社会、未来の暮らしに向けて確かな歩みを刻み始めています。

取組初年となる2024年は、田んぼへのシラスウナギ放流試験をはじめ、環境造成、魚道設置の検討、そして検討委員会の開催など、多方面にわたる取り組みを行いました。活動を通して見えてきた課題も多くありますが、それ以上に、各地からのサポーターの皆様や研究者の方々、仲間たちの知恵や情熱がプロジェクトに力強い推進力を与えてくれました。本当にありがとうございます。

このレポートは、日々の試行錯誤と小さな前進の積み重ねを記録したものです。ご覧いただいている皆さま一人ひとりの存在が、この取り組みにとって大きな支えであることを、改めて実感しています。いただいたご支援は、ウナギの未来、そして地域の生態系と文化の継承に着実に活かされています。

絶滅の恐れがある野生生物の国際取引を規制するワシントン条約を巡り、欧州連合（EU）が、食用のニホンウナギを含むウナギ類全種を規制対象とする提案を準備していることが先日、報道されました。まだ、実際に提案が採択されるかは分からない状況ですが、提案が認められた場合には日本で消費するウナギの輸入や流通に影響が出る可能性があります。このような状況も注視しながら、現在はより取組の輪を広げていくことができるように、一般社団法人の設立に向けての検討を進めております。

「ウナギがゴヨゴヨといて、その中で子どもたちが笑いながら遊ぶ風景」。
そんな未来を描いて、これからも丁寧に、そして楽しみながら進んでまいります。今後とも、引き続き温かく見守り、応援いただけましたら幸いです。

2025年4月

うなぎ食べ継ぐプロジェクト事務局一同

「うなぎ食べ継ぐプロジェクト」年次報告書 ―2024年 活動記録― **概要版**

2025年4月 発行

企画・制作 株式会社エーゼログループ うなぎ食べ継ぐプロジェクト事務局
協力 うなぎ食べ継ぐプロジェクト検討委員

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

本報告書の著作権は、うなぎ食べ継ぐプロジェクト（事務局：株式会社エーゼログループ）に帰属します。

本報告書の全部または一部を、著作権法で認められる範囲を超えて、無断で複製・転載・改変・配布、転売すること、ならびにスキャンやデジタル化を含む電子的手段による複製を固く禁じます。

また、営利目的での使用や、第三者への提供・転送についても、著作権者の事前の許諾なしに行うことはできません。

本報告書からの引用等を行う際は、出典を明記のうえ、著作権者の許可を得てご使用ください。

（本書に関するお問い合わせ）

株式会社エーゼログループ
うなぎ食べ継ぐプロジェクト事務局

Mail unatsugu@a-zero.co.jp



うなぎ
食べ継ぐ
PROJECT